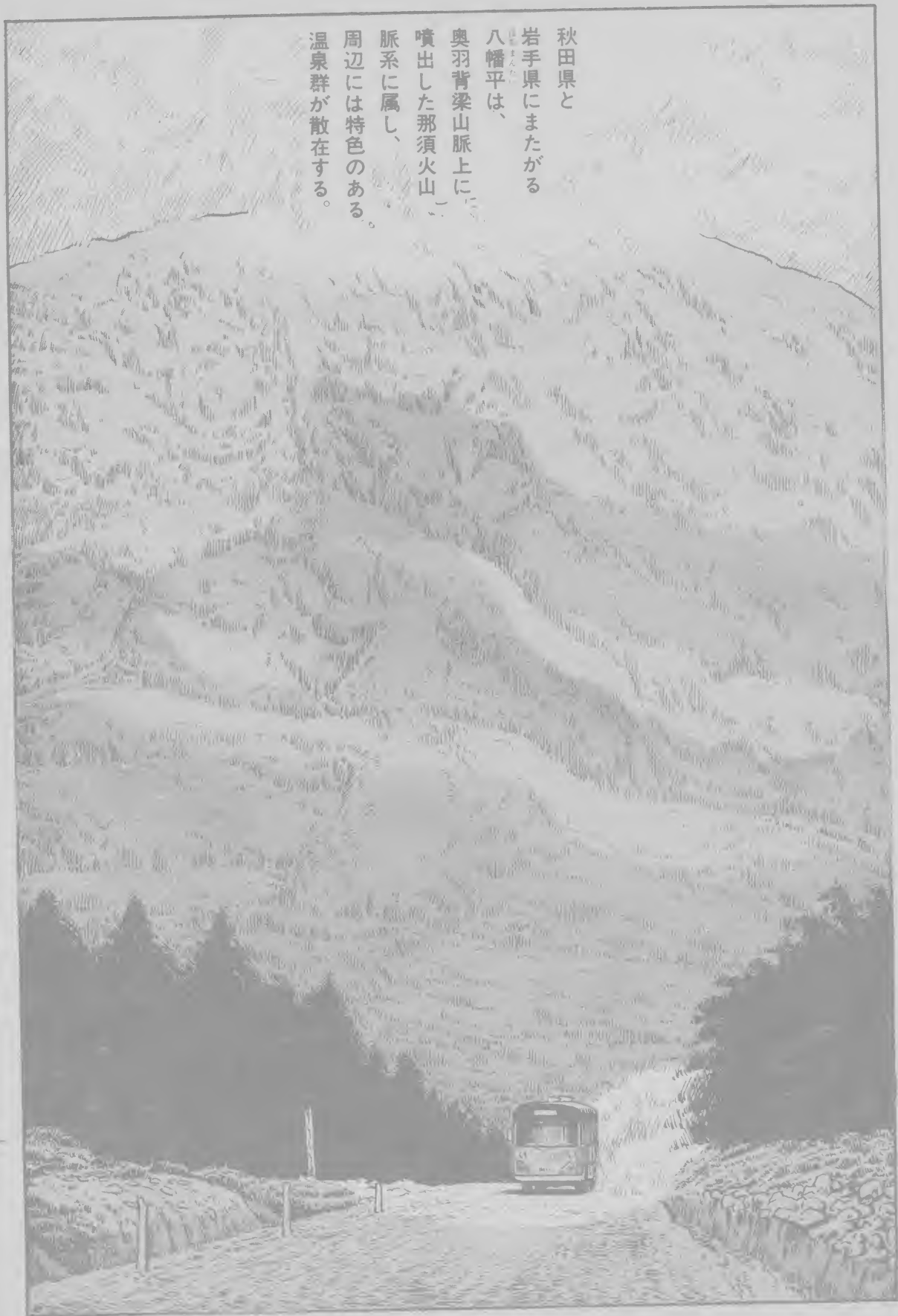
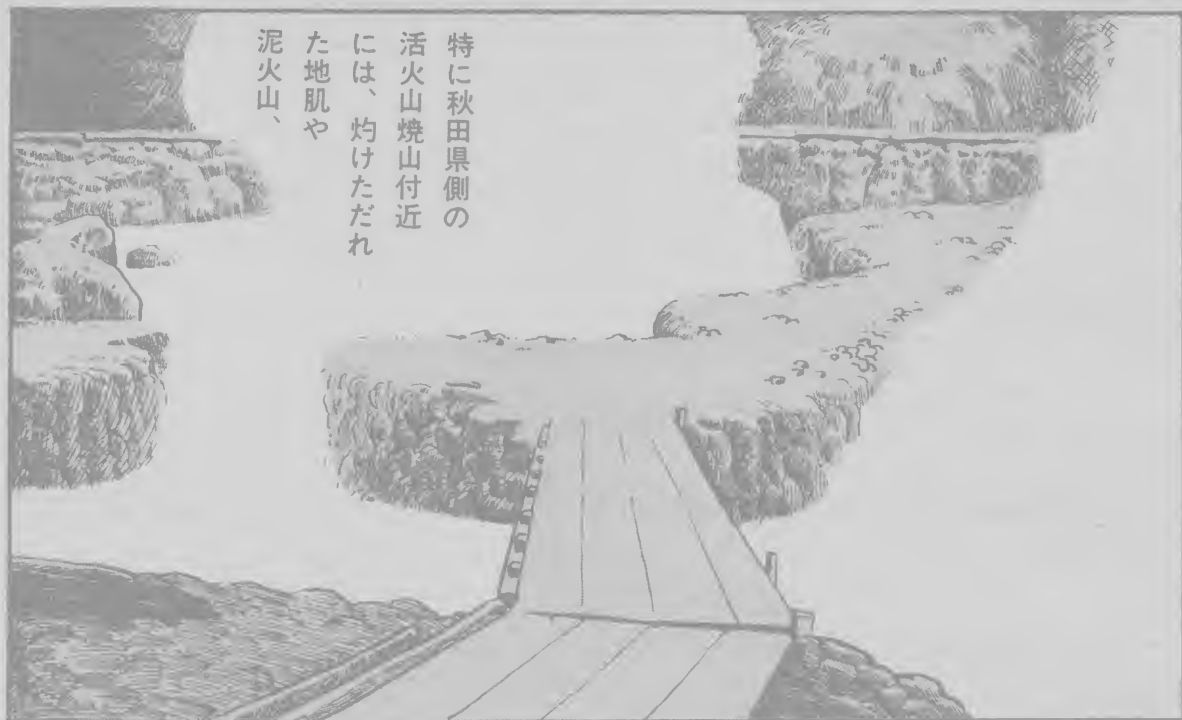
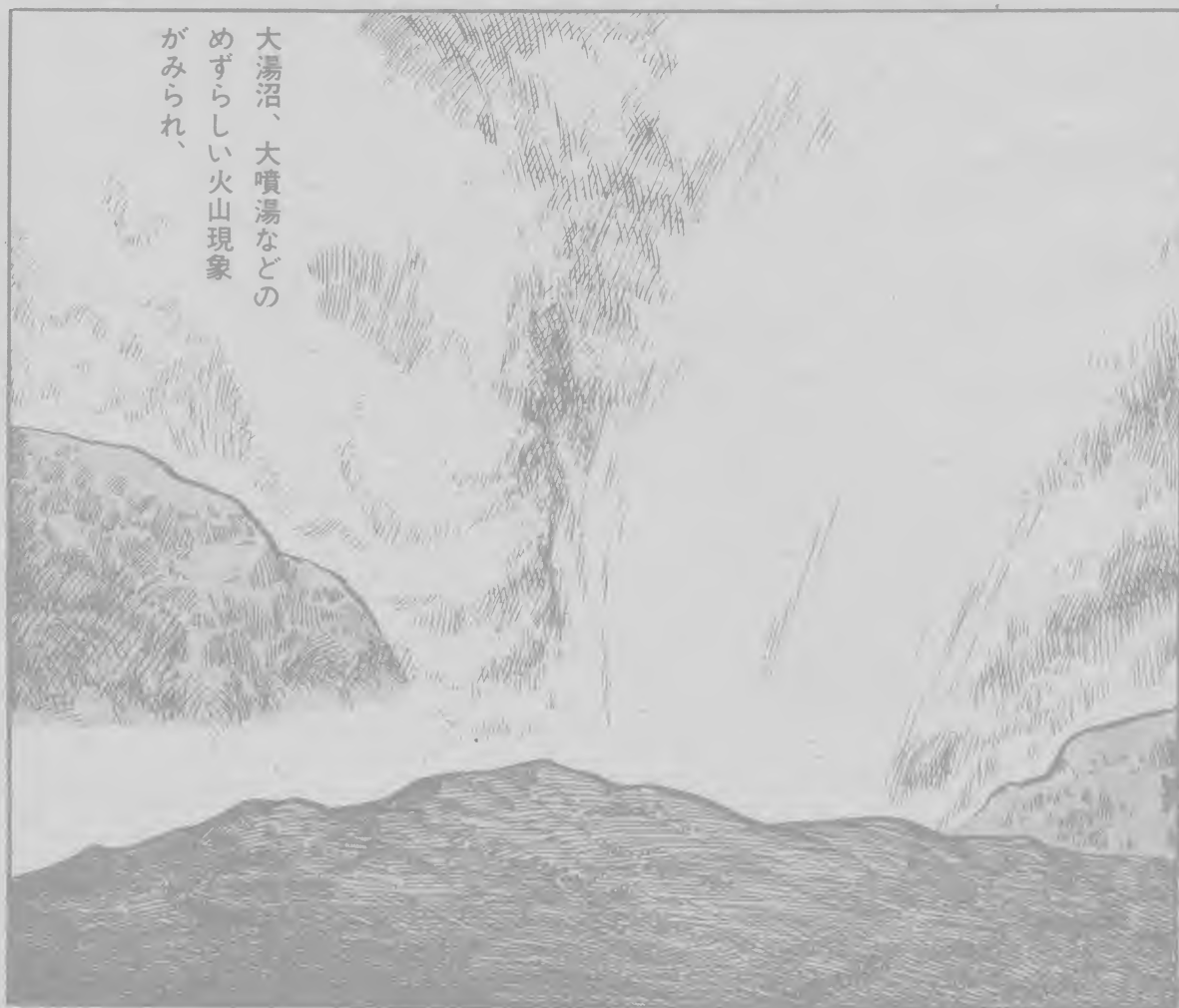
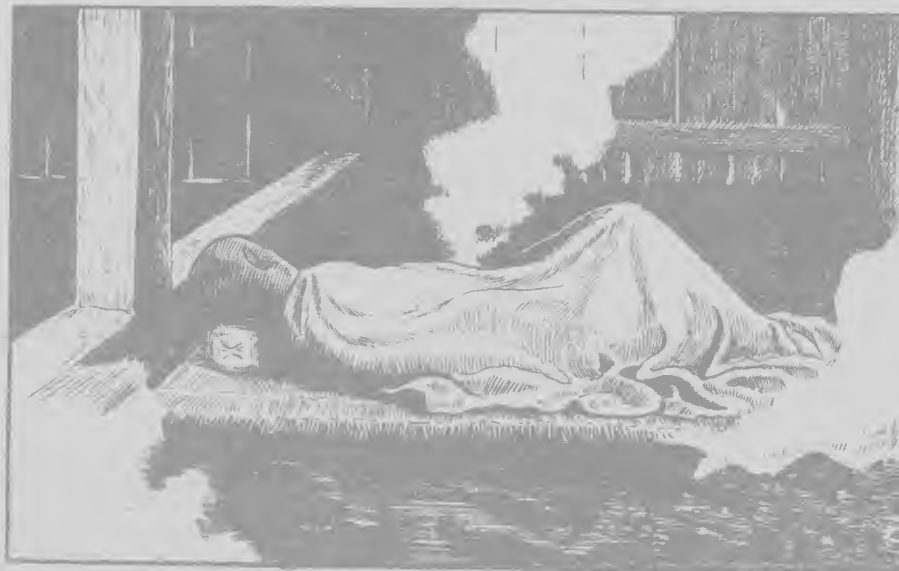
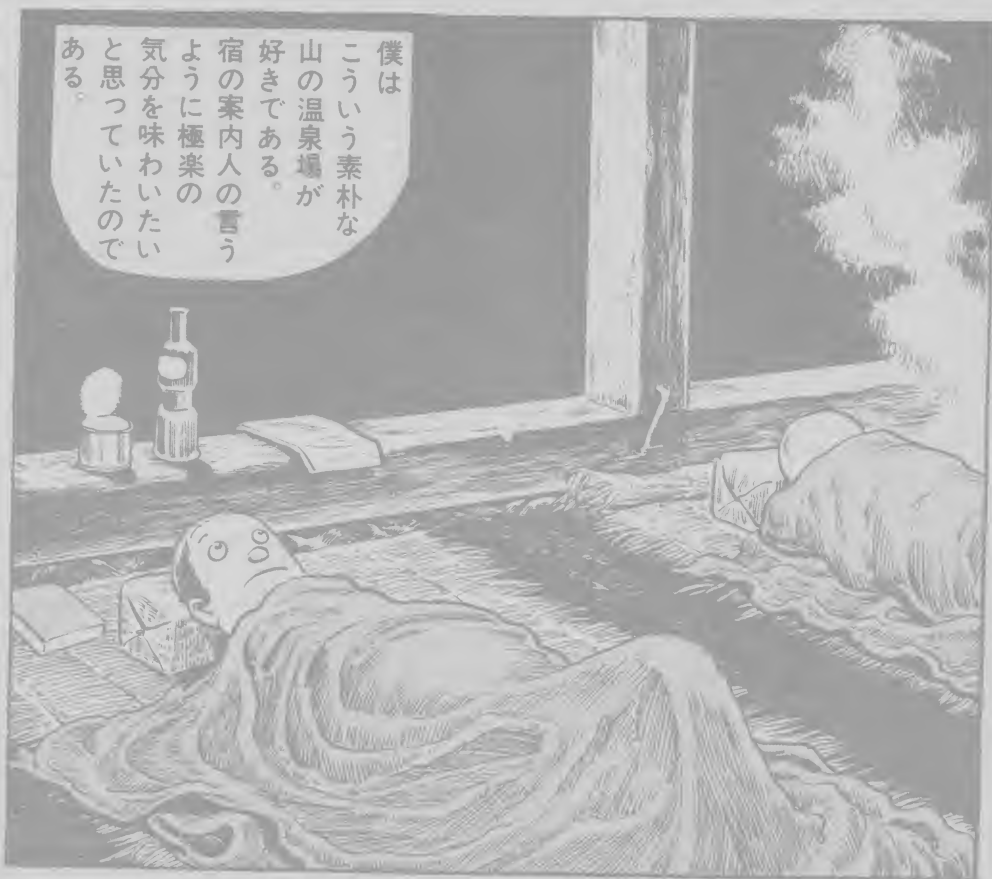
オンドル小屋

つげ義春

秋田県と
岩手県にまたがる
八幡平は、
奥羽背梁山脈上に
噴出した那須火山
脈系に属し、
周辺には特色のある
温泉群が散在する。

大湯沼、大噴湯などの
めずらしい火山現象
がみられ、

それらをとりかこむ玉川、後生掛、蒸の湯などの各温泉には、オンドル式という奇妙な入浴(?)法がある。

地の底からフツフツと
噴き出す蒸気の上に
ムシロを敷いて寝ると
おもわず、極楽極楽と
言わずにはおれないと、
蒸の湯の案内人は
説明をしていた。

けれども、ときには、何を勘違いしたのかまるで場違いな
人間もやって来たりする。
そして僕の旅心をくじこうとするのだ。
——以下かれらの行状を記してみよう。

ここが
一番すいとり
ますです
ひえッ
きたねえ
処だなァ

まるで
豚小屋
じゃねえ
かよ
オース
先輩
オース

だれだよ
登山や
ハイキングの
カワイコ
ちゃんが
いっぱいいる
なんて
いったのは

ジジイと
野郎だけ
じゃ
ないかよ

寝るときは
裸になって下せい
汗で下着が
びっしょりに
なりますから

おーい兄貴
こんな処に鏡台
があるぜ

それに
赤い
オベベ

おや
花も活けて
あるぞ

いたずらを
しねいで下せい
そこは食堂の
従業員の
寝床です
から

食事は
外に食堂が
ごぜいますだ

かれらは
すぐに
花札を
始めた。

あたりはばからぬ大声で、なにやらわけのわからぬカケ声をかけ合いながら熱中しだしたのだ
サアーサアサアサアどっちもどっちもどちらもどっちも

それいどっちもどっちも

どちらもどっちも

そしてゲームは、一人がばかヅキしているのだ。
困ッちゃうなァこんなにツいちゃってえ

どおっしっようお

こんなに勝っちゃってえ

おいオシゲさんこんなに勝たしちゃっていいのかよ
こうなったら共同作戦でやらなきゃ手がつけられねえぜ

いやだよテッちゃんは俺よりツいてねえから
そうかいそうかいわかったよ

みんなして俺をいじめようってのだな
それいどっちもどっちも

どちらもどっちも
おめらはそういう薄情者だったのか

ケッ泣きが入ったせ

なァくうなァ♪
こばとおよ
こころのよ
つうまァ
よー♪♫

こいつへんな唄うたうなよ
気が散るじゃねえかよ

はーるばるきたぜ♪
ブータ小屋へ♪♫

ふざけんなッてのに

おいアオタンだよ二百円

くそッおらもうやめた!

こんなふざけた奴とはやりたくねえ
こいつ負けるとすぐこれだ

てめいが
もっと
しみじみ
やらねえ
からだよ
なにを
すんだよ
このやろ
やるの
カッ
なに
い
弟の
くせに
なまいき
なッ
ポカ
こにやろ
こにやろ
おいやめろ
やめろ
兄弟ゲンカ
はみっとも
ないじゃ
ねえかよ
うッ
ボカ
くッ
くッ
くッ
クククククク
くそッ
くそッ

ドカ

フウ
ハア
みやかれおら二ツもなぐったぞ

疝気の湯
乱暴な人たちですね

いったいこういう山の温泉場を何と心得ているのでしょう

花札をするなんてもってのほかです
ねえそうではありませんか

あの どっちも どっちもと いうカケ声は もっと本格的な 賭場でやる ものです

そうです あの奇妙な カケ声には がまんでき ません
これは 断固抗議を するべきでは ないでしょうか

けれどもね 連中は 殺気立って おります けんのう

へたに 逆らっては なぐられるかも しれませんよ

あ、あの これ 花札の 入墨 ですね
へえ 四十八枚 あり ます

わすらも さんざん やったもん です
…………

いいか
今度
ふざけたら
しょうち
しねえぞ

それいッ

大きいことは
いいことだァ

それっ
いいことだ

もしもしそれをいたずらしてはバチが当たりますぞ

これはこうして抱いてはいるものです
金勢明太

あれえ?

おいちょっとみてくれないか

あッこいつ

どうしたんだよこの頭は

オシゲさんみたいに自分で髪をそごうと思ったんだけどな………
バッカだよおこいつは

なれないまねするからだよ

とうする気だよこんな山奥じゃ床屋なんかあるわけないぞ
おらえらいことしちゃったな

おやこいつ………

ザザーッ

なッ何をするんです
やいてめい笑ったな

僕は笑ったりなんかしませんよ
それじゃなんで後を向いていたんだヨ おかしいから後を向いていたんだろ

しかし僕は笑ったりなんかしませんよ
とぼけるなッ

こいつくやしいなア
半分笑ってるくせにして

そんなにおかしけりゃ堂々と笑ったらどうなんだよ

笑えッ

笑えッ

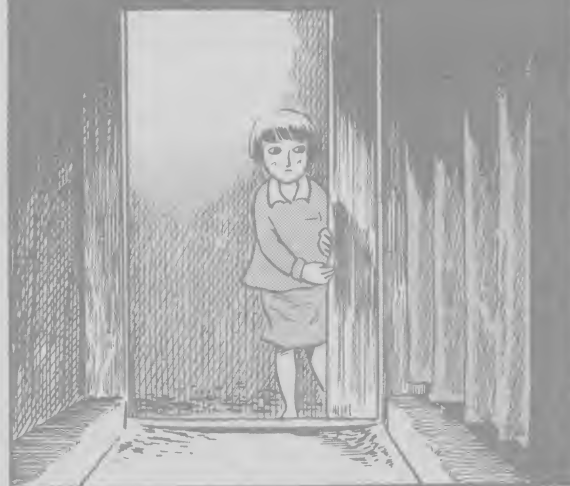
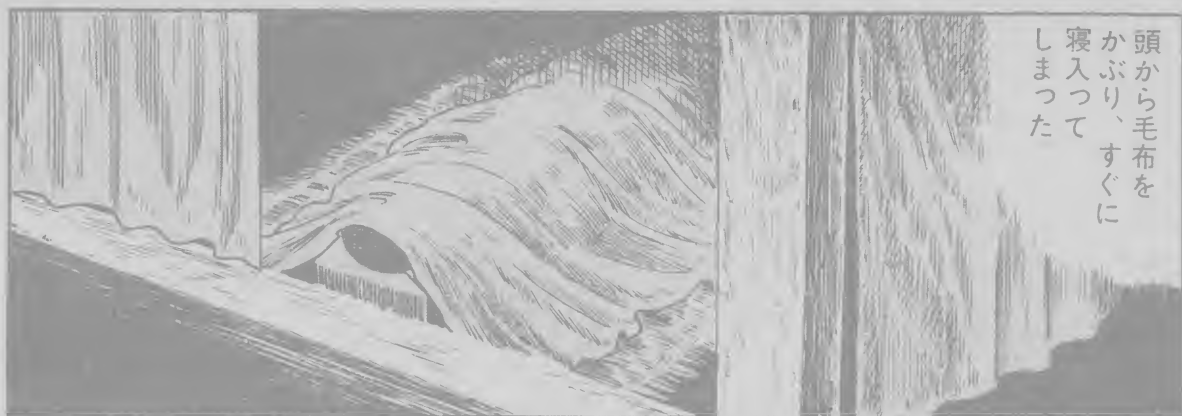
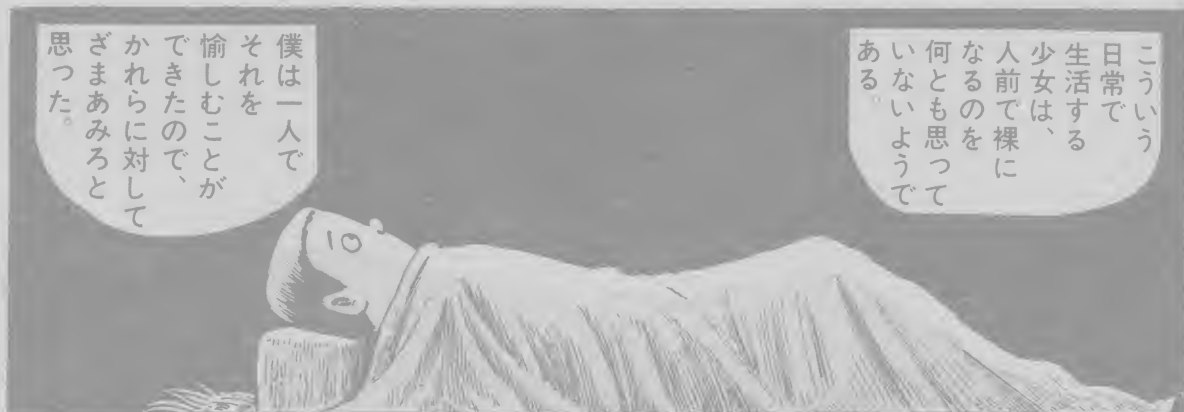
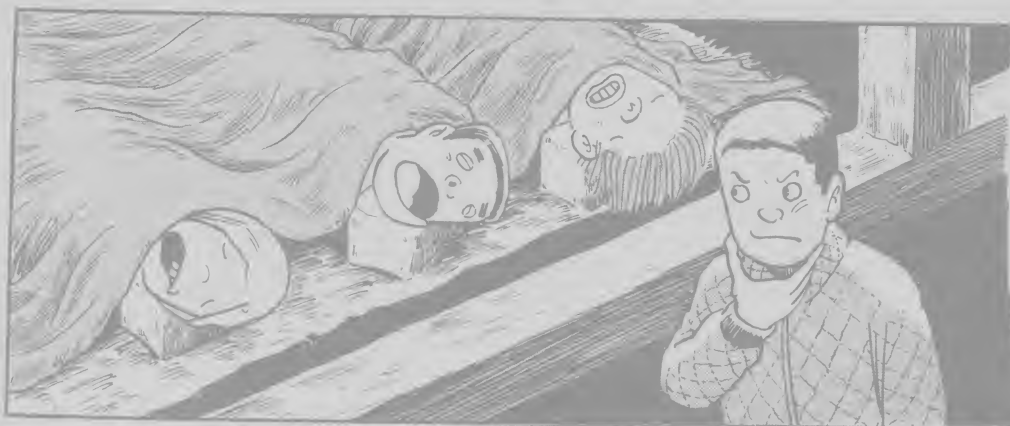
おいよさねえかてめいのオッチョコチョイをみたら誰だって笑わずにいられるかよ

くそッ

くそッ なにがくそッだよ

なにが甘くみるなだよ

しかもかれらは
けっして容赦しないのだ。
夜になってからも
先ほど負けた者の
復讐戦を展開する
のである。

それい
どっちも
どちらも
どっちも

しかし、かれらの奇妙なカケ声は一晩中つづき、過敏な神経の僕は一睡もすることができなかった。

どっちも
どっちも
どちらも
どっちも

旅の思い出というのは
不思議なもので、
楽しかった記憶ばかりが
残る。
僕の蒸の湯の思い出も、
後日ほほえましく語れる
だろうと思っていたのだが、
……………………
思い出すたびに腹が立つ
のである。

完

執拗な残酷描写こそ……

矢口　忠徳（長野・19歳）

読者サロンに於ける読者の感想を少少読んでみると、白土三平氏に対する批評を避けているような気がする。彼らは自分の感じた事に自信を持つべきだ。

先ず感ずる事は、あれ程残酷物作家と言われ、評されて来た氏の作品としては、残酷さが足りないと思います。以前よりは甘くなったと思わざるを得ません。現実（而も現代に於ける現実）は、更に残酷極まりないと思います。その最もよい例が最近アメリカから戻って来た原爆フィルムです――原爆フィルム、あれぞこの世の地獄である。もしかすると地獄よりも恐ろしいかも知れぬ。焼け爛れた地。その上に蠢き声も出ぬ人々。熱のために、浴衣の模様が膚に焼きついた若い女。頤の骨が、肉が削げたために、白く露出されている少年。「我々は、目を背けたくなるような事を人に伝えたいと思うならば、それを直視し、現実そのものを伝えなくてはならない。如何なる大げさな言いまわしも、現実には劣る」――これらと白土氏の残酷さ（特に「カムイ伝」に於ける）を比べてみると、やはりがっかりしない訳にはいきません。

迫力も以前と比べると少々減った様に思われます。脳天を上から真っ二つにたち割る場面が所々に出て来ますが、なぜ、もっと克明に描写しないんでしょう。なぜもっと頭を割るという事に対する恐ろしさ、残酷さ、背中を走る戦慄、等々……とても常人の想像の域を脱したもの、常識では想像不可能なものを読者にわかってもらおうとしないのでしょうか。

私の白土氏に望みたいのは、頭を割られた肉体の克明な、執拗な描写であり、腹を割られた婦人の（「赤目」に出て来る。猶、私は白土氏の代表作品といえば、「忍者武芸帳」よりも「赤目」を選びたいと思う）更に酷しい嘔吐を催す、気の弱い人なら気絶するかも知れぬ現実を、読者に伝える事なのです。氏の怒り、憎悪、戦慄……を読者に伝えて欲しいのです。

なおも残酷な現実を、憤怒し、嗚咽を押えるために歯をくいしばり、頬を涙で濡らしながら、目を大きく残酷なる酷いものへ見開いて、執念深く描写する事なのです。……こういう事の出来る人は白土三平先生を除いてありません。健闘を祈ります。

蛇足ですが、「ガロ」の絵が下手であるという声を聞きます。然しこれは、アングルとゴーガンの絵を比べて、アングルの方が上手でゴーガンの方が下手である、というのと同じです。言うなれば、馬鹿げています。

マンガのリバイバルを

上杉　喬之（広島）

「ガロ」十二月号の投稿欄に、「最近のガロはおもしろくなくなった」というような意見が載っていたが、読み始めて日の浅い私には、そのおもしろさは抜群のように思える。そのおもしろさを代表しているのは、無論、白土氏の「カムイ伝」であろう。そして、この雑誌のもう一つの特徴は、勝又進氏の存在である。氏の作品は、思わずニヤリとさせ、吹出させ、ふと、恐いような悲しみを抱かせる。スマートさの欠ける「ガロ」の作品の中で、勝又進作品集は光っている。他の雑誌と比べても「ガロ」を特徴づけるものだ。もっとも「COM」という雑誌には、政治諷刺漫画があっておもしろかったが。

最後に、二言三言。編集について言わせてもらえば、第一に、活字の部分が少なすぎる。いかに漫画雑誌とはいえ、これはチトひどい。作家の近況を知らせるとかして、もう少し増す必要がある。応募作品を除いて、下らない（と私には思われる）作品を削れば、充分そのスペースはとれると思う。

第二は、すぐれた作品はもう一度載せてほしいということである。映画だってリバイバルを上映している。過去白土氏の短編の中には素晴しい作品があった。その意味で、水木氏の「鬼太郎夜話」再掲載はうれしい。この作品はへんな魅力があって、四話から先を捜していたのだが、未完だということを別の雑誌でよんだ。今回のは、コマどりが大きすぎて、絵の密度が薄いようだ。

何はともあれ、貴誌の一層の発展・充実を願うものである。

"随筆的"マンガについて

関田　孝正（東京・18歳）

私がつげ義春の作品に共感をもちはじめたのは、「古本と少女」である。はじめは「下手な絵だな。絵柄が水木しげるの真似だ」ぐらいにしか思っていなかったが、ストーリーの良さにそれも打ち消され、つい最近の「紅い花」あたりまで、氏の作品を愛読しつづけた。

氏の作品の良さは、作品全体の泥くささ、ほのぼのとした感じ、また読後、私に（私ばかりでなく、読者全体にであろうが）何かを感じさせるなどの点にある。つまり、娯楽漫画とは違うのである。

漫画も一つの自己表現の手段なのであるから、作者の気持を充分理解すべきである。漫画は娯楽だから読み捨てよいのだという考えはなくしたいものである。この傾向は、「ガロ」及び「コム」によく見られ、良いことだと思う。

さて、「李さん一家」あたりから、私なりに「氏の漫画は随筆的だ」などと思ってみたりした。「的」といったのは、理由がある。つまり、随筆の手法を借りながらも、何かを私に与えてくれるからだ。

しかし、「西部田村事件」以後の作品は、単なる随筆に終って何も残らないのである。私は、あくまでも「的」を尊重しているのであって、従来の何かピリッとしたものが欠けているような気がして腹立たしい。早く言うと、最近のつげ義春の作品は、面白くない、ということである。

「ガロ」の読者へ

陵藤　勝（東京）

まったく、この欄の諸氏の投書を読むと血ヘドが出そうになる。新人をかいかぶるな！「ガロ」をかいかぶるな!! 氏らは「ガロ」を読むかたわら芸術と呼ばれているものにジックリ目を向けたことがあるのか。浅く向けてわかった気になるのとは違う。文学、絵画、音楽等のもつ価値、内包した世界、これらすべてを理解し得るか。我我の置かれている状況を深くジット眺めまわし、その恐怖を素肌に感じたことがあるか。

自然の美しさを感じ自分という存在が溶けて消え入ってしまえばよいなどと考えたことがあるか。「ガロ」を最高と思っているのか。もちろんマンガ界内においても。このひどいマンガ群に賛辞を与えるのか。この中から芸術(的)と名付きそうなもの（実際にはお話にもならぬ）をひきずり出して祭り上げ、「ガロ」も向上したなあと喜ぶのか。独自の哲学モドキを振りまわす投書に耳を傾けるのか。

これでは妙にイキがった、キザな、無能なマンガ家を多量に造り出し、「ガロ」で茶番（これを茶番と言わずに何と言えよう）を演じさせ、「ガロ」を変転より破滅に追いやることは目に見えているではないか。氏らにはそれらが見えないのか。私はそれでもよいが。氏らがこのマンガ群から受けるものはオセンチな同情であっても、感動を受けたことがあるか。こんなつまらないものより、もっと感動しそうなものは、そこらに転がっている。

しかし、真の感動（これを言葉に置き換えるのは無理）を与えてくれそうなものは極く少数しか目に入らない。それを見たまえ！ 聴いてみたまえ！ にぎりしめて（把握）みたまえ！ そして、その感動を真だと確信できるまで何十回も繰返してみよ。その感動を自身に溶かし込んで体の一部としての、「ガロ」を読んでみよ。（比較せよと言っているのではない。正規の判断力を備えよと言っているのだ）

そこで「ガロ」の諸作品について考えてみよ。安っぽい賛辞が出るか。内容の無いものをいかにも内容ありげに賛められるか。愚かな哲学モドキを振りまわせるか。私に言わせれば「ガロ」は進むべき方向を見失いつつある。すでに見失っている。正規のルートより外れて、大きく下降している。落下して行く姿を直視してみよ。何が質の向上だ。それを真に願うなら、先ず、方向を定めよ。そして能力の無い、又適さないマンガ家はどんどん締め出せ。

マンガ本来の役割に立ちもどり、（ここでマンガである以上絵も責任をもって描くことを忠告する）かつ、そこより、正規の発展ルートに踏み出せ。その発展が可能なら……。

ここまで読んで納得のいかない人のために私の「ガロ」歴を書くなどというバカげたことはする気も起こらない。私は諸氏の同意を求めているのではない。諫め、警告しているのである。しかし私にも「ガロ」内にゴヒイキが一人いる。つげ義春氏である。まだすべてに幼稚（未熟）ではあるが、そのセンスとムードは得難い魅力である。

おわりに、つげ氏は二月号の石子順造の独自（ひとりよがり）な分析（ほんの一部の把握とほんの思いつき）を読んで、さぞ苦笑していることだろう。氏の顔が目に浮かぶようだ。

☆営業部から

当社発行の『忍法秘話・別冊』『いしみつ』は、品切れとなりましたのでお知らせいたします。